
ブライド ～実験台?197～

雷雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブライド ～実験台？197～

【Nコード】

N11530

【作者名】

雷雲

【あらすじ】

時は2478年、地球は崩壊し、人類と少数の動物たちは新しい星に移り住んだ。その星の名はニューアース。新しい地球。人々は古い地球など忘れ、豊かに暮らしていた。だが、地下ではそんな平和をすべて壊すような驚くべきモノが作られていた——これは元実験台だった改造人間、ブライドがGSAと呼ばれる組織の一員となって任務を遂行していく物語である。

ブローグ

「放せ！ 放すんだ！！」

男はカビと血で汚れた通路で担架に手を縛られて横たわっていた。担架を運んでいるのはマスクをした白衣の集団。

「ぎゃああああああああ！！」

「痛い！！ 痛い！！ いやああああああ！！」

左右の扉からは悲鳴が休むことなく聞こえる。開いた扉からは人が謎の機械で集団に体を弄られているのがわかった。

その者は手を上げていたが次の瞬間手を急に下ろしてしまった。

おそらく………死亡。

「おい！ お前たちは何をしているんだ！！」

男がいくら問いかけても白衣の男は前を見つづけている。

そして前にある扉が開いた。中は謎の機械が詰め込まれていて白衣の男たちが数人いる。

「実験台？ 197到着。これから改造手術を行う」

そう言いながら男は注射器を持った。

「やめろ…… やめてくれ！！」

プスッ……

「うわああああああああああ！！」

その時男の目が赤く変色していき、脈が止まった――。

「くはっ!!……はぁ……はぁ……」

茶髪の男は目を覚ました。午前8時。

「くそっ……またあの夢か!」

男はベッドを叩く。その時、手の平から刃。

グサッ!

ベッドに穴が空いてしまった。男は舌打ちをして、刃を手の中に押し戻す。

男は茶色のコートに着替え、サングラスをかける。そしてホルスターにデザートイーグルを仕舞い、ドアを開けた。

パサッ……

「ん?」

男のポケットから手帳が落ちていく。手帳にはブライド・マーカインと書かれていた。

「ったく」

男は手帳を拾い、外へと出て行った。

キャラクター図鑑

ブライド

年齢 29

武器 デザートイーグル、手から刃を生やす、または刃に変える能力。
力。

改造人間。手から刃を生やす、または刃に変える能力を持っているが改造人間と言う事を知られたくないので人前ではその能力は使わない。ピザが好物でよく三人前ぐらいを食べる。射撃の腕は一流カイル

年齢 18

武器 コルトM1903

若くしてGSAに入った青年。Aチーム所属。青い髪に黄色い眼をしている。自分は才能を開花させていると思っているが他の人間にはまだ半人前と思われる。自分の持っている銃が大好きである。フォルテ

年齢 35

武器 SIGSAUER P250

GSAのAチームのリーダー。冷静で何事にも動じない。任務の話をするたびによくヴェンに口を挿まれる。

ヴェン

年齢 26

武器 ミニミ軽機関銃（任務時）

GSAのAチームに所属している、黒髪で赤い眼をした青年。気性が荒く暴力的。フォルテの話によく口を挿む。

シーファ

年齢 ?

武器 レミントンM700（任務時）

GSAのAチームに所属しているメガネをかけた赤一点の女。黙っ

ていればかなりの美人なのだが口の悪さがそれをぶち壊しにしている。

セブルス

年齢 32

武器 コルトM1911（任務時）

GSAのAチームに所属している金髪の男。暇があるときにはよく寝ていていつでも眠たそうな目をしている。だが射撃の腕はブライドと互角。

クレイ

年齢？

武器 コルトM1911（任務時）

GSAのAチームに所属している、茶髪でショートヘアの黒い眼をした女。

銃図鑑（前書き）

挿絵大きさバラバラです。すみません。

銃図鑑

デザートイーグル

> i 2 0 1 1 8 — 2 7 2 9 <

種類 大型自動拳銃

製造国 イスラエル アメリカ合衆国

設計・製造 IMI社 IWI社 マグナムリサーチ社 ワルサー社

口径 3 5 7 4 1 4 4 5 0

銃身長 1 5 2 m m

ライフリング 6 条右回り

使用弾薬 3 5 7 M A G N U M 弾 4 1 M A G N U M 弾 4 1 A C

t i o n - E x p r e s s 弾 4 4 M A G N U M 弾など六種類。

装弾数 7 〃 9 発

作動方式 シングルアクション ガス圧作動式

全長 2 6 9 m m

重量 1 6 5 3 〃 2 0 5 3 g

銃口初速 4 6 0 m / s

有効射程 8 0 m

F N P 9 0

> i 2 0 1 0 1 — 2 7 2 9 <

種類 P D W (個人防衛火器)

製造国 ベルギー

設計・製造 F N 社

口径 5 . 7 m m

銃身長 2 6 3 m m

使用弾薬 5 . 7 × 2 8 m m

装弾数 5 0 発

作動方式 シンプル・ブローバック方式

全長 504 mm
重量 2800 g (弾倉を除いた場合)
発射速度 900 発/分
銃口初速 715 m/s
有効射程 300 m

コルト M1911

> i 20119 — 2729 <

種類 軍用自動拳銃

製造国 アメリカ合衆国

設計・製造 コルト・ファイヤーアームズ社ほか多数

口径 45

銃身長 106 mm

使用弾薬 45 ACP 弾

装弾数 7 発

作動方式 シングルアクション ティルトバレル式ショートリコイル

全長 216 mm

重量 1130 g

SIG SAUER P250

> i 20121 — 2729 <

種類 自動拳銃

製造国 ドイツ

設計・製造 SIG SAUER 社

口径 9 mm 40 357 45

銃身長 102 mm

使用弾薬 9 mm パラベラム弾 40 S&W 弾など四種類

装弾数 15 + 1 発 (9 mm パラベラム弾)

作動方式 ショートリコイル ダブルアクション

全長 180 mm

重量 720 g

コルトM1903

> i 2 0 1 2 0 — 2 7 2 9 <

種類 自動式拳銃

製造国 アメリカ合衆国

設計・製造 コルト・ファイアーアームズ社
ブローニング・アイムズ社

口径 32

銃身長 127 mm

使用弾薬 32 ACP弾

装弾数 8 + 1発

作動方式 ブローバック

全長 205 mm

重量 930 g

ミニミ軽機関銃

> i 2 0 1 2 2 — 2 7 2 9 <

種類 軽機関銃

製造国 ベルギー

設計・製造 FN社

口径 5.56 mm

銃身長 465 mm

使用弾薬 5.56 mm x 45

全長 1038 mm

重量 6.9 ~ 10 kg

レミントンM700

> i 2 0 1 6 2 — 2 7 2 9 <

種類 ハンティングライフル

製造国 アメリカ合衆国

設計・製造 レミントン・アームズ

銃身長 508 600・4mm(20 26インチ)

ライフリング 右転

使用弾薬 最小・17レミントン 最大・458Win Mag
で各種あり

装弾数 単発〜6発(薬室内含む。口径により異なる)

作動方式 ボルトアクション方式

全長 1006・4 1181・1mm(銃身長によって異なる)

重量 3180〜4250g

銃口初速 口径により異なる

有効射程 口径により異なる

Chapter 1

AM 9:20 ヲベギラン マイルガ上空

ブライドは新聞を読みながら窓の景色を見ていた。窓の外は青一色。下はぼやけているが高層ビルが建っていた。新聞にはこう書かれている。

9月6日、午前10時ごろガリブラのレイグリンでテロリストによる建築会社マケイル本社の襲撃事件が起きた。警察の調べによるとテロリストたちは最近建築したマーケディングビルのデータを入力しようとしたらしい。テロリストたちは警察が来た頃にはすでに拘束されており、警察は慎重にテロリストから動機を調べている。

ブライドは新聞を綴じて黒い携帯を出した。離陸からまだ一時間。まだ暇な時間を過ごさなければいけない。ブライドはそのまま目を閉じた。

この世界、ニューアースではガリブラ、ゲイラス、ベギラン、フイエイラと言う四つの国に分かれている。

言語はどれも同じであり、ガリブラはブライドのような白人が住む場所であり商業が活発な国である。武装報道陣がいる。

ゲイラスは黒人が住む場所。産業が活発な国である。大気汚染は？1。最近では汚染物質を出さない工場も作られている。犯罪は少ないとは言えない。

ベギランは人口密度？1で条約が一番多い国。環境、安全、健康、どれもレベルが高く最も暮らしやすい国とも言われている。学力は平均。黒人、白人などさまざま。

最後にフイエイラでは農業が活発な街であり約80%の食料がこ

これから生産されている。とても平和な国と言える。こちら黒人、白人などさまざま。

AM 11:26 ーガリブラ セフィラス空港ー

「まもなく着陸します。シートベルトをお締めください」

ブライドは目を覚ました。携帯を仕舞ってシートベルトを締める。
「もう……時間か」

機内が揺れ、飛行機がゆっくりと止まる。ブライドはシートベルトを外し、ドアの方へと歩いた。

「いやあああああー！」

甲高い女の悲鳴が聞こえる。どうやら飛行機の外らしい。そして連続して銃声が聞こえた。

乗客はざわめき始める。

「何だ何だ？」

「今のは……銃声？」

「おい、お前ちょっと行ってみるよ」

「無理だよ。テロリストだったらどうすんだ」

ブライドは気にせず歩く。近くにいた青年がブライドのコートを引っぱった。

「おい、お前さっきの音聞いたのか？」

「俺には関係ない」

「な……」

ブライドは手を振り払ってそのまま歩こうとした。その時ドアから頭から血を流して倒れている女が入ってきた。

乗客は一斉に悲鳴を上げブライドを突き飛ばし、ドアから出ようとした。だが、次の瞬間乗客はまたこちらへ戻ってきた。怯えている。

（……やはりそうなるな）

乗客は三人のテロリストに銃であるFN P90を突き付けられ

ていた。

「いいかお前ら！！　ここは俺たちが占領した！！」
乗客は震えている。

「おいお前。パラシュートはあるか？」

リーダーらしき者がパイロットに聞いた。

「え！？……あ……」

「さっさと答えろ！！」

「30個……」

「そうか」

パイロットにそう聞くとテロリストはパイロットの頭部を撃った。
血が窓に飛び散る。

「いやああああああああああああ！！！！」

若い女が悲鳴を上げ、走ってドアから出ようとした。

「うるせえ」

ガガガガガガン！！

女に無数の穴が空き血が雨のように客にかかる。

「てめえらもこういうようになってほしいか？」

客は全員横に首を振った。

「邪魔だな……」

ブライドはそう言った。客は驚いてまた人が殺されると目を瞑っている。

ズダァン！！

銃弾が撃ち抜いたのは一人のテロリストだった。その者は手を押えて倒れこむ。

「て……てめえ！！」

後ろにいたテロリストがを向ける。ブライドは何と片手でデザー

トイーグルを持ちFN P90を撃った。

テロリストからFN P90が離れ、ブライドが膝に二発ずつ銃弾を撃ち込む。テロリストは立てなくなり銃を持てないよう手も撃たれてしまった。

「ぐおおおお……」

テロリストが蹲る。ブライドは背を向けている最後のテロリストを蹴り飛ばした。

「ぐおっ!？」

テロリストは窓に頭を打ちつけ振り返る。ブライドは急所に蹴りを入れ悶絶しているところを首を絞め数分かけて気絶させた。客はまだ目を瞑っていた。

ブライドはデザートイーグルを仕舞って携帯を取り出す。

プルルルル……プルルルル……プチッ……

「ブライドか？」

電話の相手は声が低く男らしい。

「ああ、セフィラス空港に後始末係の奴らを頼む。テロリストだよテロリスト」

「わかった。ヘリを送るのでお前もそこから離れる」

「わかつている」

「よし、切るが、良いな？」

「……この近くにピザ屋はあるか？」

「またか。俺たちを地図か何かと思ってるんじゃないだろうな……まあいい、そこから出た右にピザハウスがあるから。時間には遅れないようにしろよ。まあお前が遅刻するのはもはや当たり前になっているからな」

「ちよつと待て」

「まだ何かあるのか？」

「嘘だよ。もういい」

『はあ……切るぞ』

ブライドは携帯を仕舞った。

「ピザハウス……あの有名な店か。でもあの店には劣るだろうな……」

後ろの空から黒いヘリがやってきた――。

AM 11:54 〽ガリブラ シラフィス第5区 ピザハウス〽

「――これも結構いけるな」

ブライドは店で三枚目のピザを食べていた。客は多数いてほとんどが家族連れだ。

「しかし、このソーセージがいいんだよな」

また一口ピザを食べる。その時、黒い半袖のシャツを着た男がやってきた。銃のホルトM1911がホルスターに仕舞われていた――

「いよう！ ブライド！」

「……カイルか、こんな所に何しにきた」

男、カイルは椅子に座り込んだ。

「いや〽毎度毎度の如く仕事が少なくてよ〽戦闘報道陣もぜんぜん動かなくて暇なんだよ」

「それこそ平和でいいじゃないか」

「暇なもんは暇なんだよ〽」

「ならもつといい成績出せよ」

「いやいや、俺はもともといい成績出してるけどよ。皆が俺の才能に気付いてくれないんだ」

「まだ18なんだから後で才能が開花するんだよ」

「もう才能は開花してるっつーの！ ……ハックシュン！」

「……まだ冬だぞ？ どうして半袖のやつを着るんだ？」

「いや、もう服がこれしかなかったんだよ。洗濯するタイミングが分からないんだ……」

「ふっ……そうか」

「あっ！　今鼻で笑ったな！！」

「俺は本部に行く、後は頼むな」

ブライドは席を立った。

「おい、代金俺に払わせようとしてるだろう」

「やはりばれたか」

ブライドは代金を置いてピザハウスを去った――

PM 12:20 〽ガリブラ シラフィス第1区 ある倉庫〽

ガシャン！！　ガシャン！！

ブライドは寂れた倉庫のシャッターを二回ほど蹴った。あたりは木材や鉄筋などが積まれて置いていた。人はブライド以外いない。シャッターの向こうから声が聞こえてきた。

「……誰だ？」

低いしわがれた声が聞こえる。電話の相手とはまた違った声だ。

「俺だよ……ブライド」

ガラガラガラガラ……

シャッターを開けたのは黒い服を着た老人だった。

「まったく、乱暴に合図するなっちゅうの。不良かと思ってしまっ
てしょうがないのじゃ」

「俺はこっというのが好きでな」

「はあ……入れ」

老人に導かれ、ブライドはシャッターの奥へ行った。

中は薄暗く、天井にある照明は消えかかっていた。

「また暗くなつたな」

「替えをまだ貰つてないんじゃないよ」

「そうか……後で報告しとく」

「頼むな。ここでの仕事はきつい。早く交代時間がこないかのお」

「そうだな。でも給料は高いんだろ？」

「それが嬉しいんじゃないよ」

「ふっ……」

ブライドは奥にあるエレベーターに乗り、地下へ降りて行った――。

Chapter 2

ウィイウィイウィイン……

ブライドの着いたところはガリブラフォースと言う地下施設である。ここではガリブラの犯罪に関するデータが集められ、犯罪度が高い犯罪を処理する者たちとその犯罪の存在を隠蔽する者たちが集まる第二の警察署である。ブライドはここが仕事場なのだ。

「ガリブラの六時から十二時までのレベル5の事件数は22。そのうち、テロリストが15件。戦闘報道陣が5件。その他2件です。これらすべての事件無事に処理されています」

「あいかわらずテロリストが多いな……よし、引き続きガリブラによる犯罪のデータを集めてくれ」

「わかりました」

エレベーターから降りたブライドをメガネをかけたスーツの女性が通り過ぎる。

「所長。遅れてすまない」

ブライドはスーツの女性と話していた五十代のスーツの男に話しかけた。

「まったくだブライド。いったいいつ遅刻癖が治るんだ？」

「いつつも反省してるから許してくれ。仏の顔も三度までっていうしな」

「もう百度ぐらい越えていると思うがな」

ブライドはその場から離れ、奥へと向かった。

天井にはニューアースの地球儀、新地球儀がぶら下がっていた。所々赤い点がついていてテロリストが起こしたハイジャック、戦闘報道陣が起こした外務大臣誘拐事件などの事件がその赤い丸のそ

ばに書かれている。新地球儀の20パーセントが赤い丸に覆われていると言ってもいいだろう。小さな犯罪となると一日で2000以上は赤丸が出る。そのくらいこの世界はベギランとフィエイラ以外犯罪が多いのだ――

「――みんな。遅れてすまない」

「遅すぎるぞ！ ブライド！ カッコつけやがって！！」

「まあまあ……」

「……………」

「ブライド、俺より遅いっておかしくねえか？」

「ヴェンの言う通りだ。遅すぎるぞ、ブライド」

ブライドはある部屋に着いた。

その部屋には様々な映像機種やパソコン、コピー機などが端に並べられてあり、中心には大きな円型の机が置いてあった。その五つの椅子に、カイル、黒髪で赤い眼をした緑色の半袖のシャツを着て、その上から青色のボタンがすべて外れた服を着た貧乏揺すりをしている青年。金髪で灰色の長袖の服を着た寝ている男。メガネをかけ、赤色のパーカーを着て赤い髪をした赤一点の女。そして髪を一つに束ねた黄土色の髪をしたスーツの男が座っていた。

「すまない。リーダー」

「まったく。GSAとしての誇りはどうしたんだよ！」

「うるさいから黙っててもらえないか？ セブルスのようにな」

「あいつは眠ってるだけだろう！ なあ、シーファア！？」

「うるせえ」

「ヴェン。そのくらいにしとけ。これはリーダーからの命令だ」

「……ちっ！」

「……さて、全員そろったので早速任務だ。おい、起きろ。セブルス」

「う……う……」

ブライドは空いているもう一つの席に座った。右には赤一点の女。左にはカイルが座っている。

今起きた男はセブルス。暇があるときには必ず寝ていていつも眠たそうな顔をしている。だが、射撃の腕はブライドと互角。

貧乏揺すりをしていた青年はヴェン。気性が荒く、暴力的。

赤一点の女はシーファ。黙っていればかなりの美人なんだが、口の悪さがそれをぶち壊している。

スーツの男はこの集団のリーダー、フォルテ。冷静で何事にも動じない。

G S Aは^{ゴースト}G h o s t^{スペシャル}S p e c i a l^{エージェント}A g e n tの略であり、主にテロリスト殲滅、戦闘報道陣の鎮圧、人質救出、諜報活動などの任務を請け負う集団である。何個かのチームに分かれており、ここでは^{アルファ}Aチーム、^{ブラボー}Bチーム、^{チャーリー}Cチームの三つがある。ここにいた五人もその一員であり、ブライドもその中の一人である。

「さて、今回の任務はだが――」

「――クレイは？」

「……前に言っただろう、ヴェン。彼女は先に戦況を確認している。後で会えるだろう」

「早く会えないかな」

「……今回の任務は、人質救出だ――」

「えゝまたかよゝ諜報活動とか全然できないしゝ」

「お前はそれだけをしたいのか」

「うん。」

「……今回の任務は人質救出だ。場所はガリブラのゲリファアの第4区。ギガントビル――」

「俺はあそこは――」

トン……

ヴェンの額にSIG SAUER P250が当てられていた。それを持つフォルテ。その指がトリガーを引こうとしている。

「わ、わかった……もう言わない……」

そう言うつとフォルテは銃を下ろし、話し始めた――

今回の任務はガリブラのゲリファー第4区のギガントビルでの人質救出。テロリストがギガントビルに立て籠っていて、30人の人質と引き換えに逃走用のヘリ三機を要求している。人質はどこにいるかは不明。テロリストの人数も不明。首謀者も不明である。

「――さて、そろそろ行こう」

ブライドを含め、六人は部屋を抜けて行った――

P M 12:39 ガリブラ シラフィス第一区 ガリブラフォース
専用ヘリポート

バン！……

ヴェンが重い扉を蹴り開く。六人は地上に行き、また違う所に着いたのだ。

右のヘリポートにブライド達が乗る。残りのヘリにも別のチームが乗る。

ヘリにはすでにパイロットが乗っていた。

「全員乗ったか？」

「OKです」

フォルテがドアを閉めながら言った。

「よし、離陸するぞ」

ヘリは離陸し、ヘリポートを去った――。

Chapter 3

「それで、今日も同じ配置に着くのか？」

ヘリの中でブライドが座席に座りながらフォルテに聞く。

「ああ、そうだ」

ブライドが言った配置とはリーダーやポイントマンなどの役割のことである。

リーダー

L D R

指揮官の位置にあり戦術的な作戦決定を行うチームの核。フォルテがこの位置についている。

ポイントマン

P M

チーム内では最も危険なポジション。最前線での戦闘を任務とするため最も優秀な者が就く。ブライドがこの位置についている。

バックアップマン

B U M

前衛の援護役。そのためP Mとコンビで行動することが多い。セ

ブルスがこの位置についている。

オムニマン

O M

機器の操作や重火器の整備、運搬などが主な任務。後方での戦略的な行動が必要とされる。ヴェンとクレイがこの位置についている。

リア・セキュリティ

R S

警護、後方警戒などが主な任務。時には狙撃手にもなる。シーファ、カイルがこの位置についている。

「今日は私の出番はあるのか？」

シーファがフォルテに問う。

「テロリストが上空に逃げたらな」

「分かった」

「……さて、どうだろうかね……」

ヴェンが持っているコルトM1911にマガジンを入れながら言

った。これはGSAの正式に採用された銃なのである。

「だけど、こんな話をしているとあの射撃演習を思い出すなあ」
ヴェンが続けて行った。フォルテは少し頷く。

「確か、ブライドとセブルスどっちかが一位だったっけ」

「そうだったか？」

ブライドは半信半疑だ。

「同じくそう思うな」

フォルテも半信半疑らしい。カイルは予備のマガジンに弾を入れていて、シーファは窓に顔を向けている。セブルスは熟睡していて、ヴェンは首を傾げていた。

「でも、ブライドとセブルスが争ってはいたよな？」

「多分それはそうだろうな」

「同じく」

ブライド、フォルテもその件に関しては覚えているらしい。

「なら、誰が一位だったっけ……」

「……」

三人はそれから黙り込んでしまった。カイルが全てのマガジンに弾を入れ終わった――。

PM12:53 ーガリブラ ゲリファ―第一区 ダガン警察署
前ヘリポートー

バラララララ――

ヘリがゆっくりとヘリポートに着陸する。そこに出てきたのはブライド、フォルテ、セブルス、ヴェン、カイルの五人だった。全員防弾ベストを装着していて、ポーチにはそれぞれのマガジンが十個入れられている。

「ここが目的地に一番近いヘリポートだ」

パイロットが言った。

「ああ、分かった」

五人は離陸するへりを背にG S A専用の装甲車に乗った。

装甲車の名前はカイティーン ロック11。車製造会社で有名なカイティーン社が開発した新型の装甲車だ。

防弾ガラス、耐弾ボディに手榴弾やクレイモア地雷程度の爆発物なら至近距離で爆発しても耐えられる耐爆ボディ。

爆発や狙撃などでパンクしても強制的にタイヤを膨らませてその場を離脱できる特殊車輪の装備（ランガードシステム）

燃料タンクが被弾しても爆発しない特殊な構造の軍用燃料タンク。そして大きくバランスを崩してもすぐに耐性を整える設計がしている車だ。

ヴェンは運転席に乗り、助手席にはフォルテが乗り、他の者たちは後ろの座席に乗った。

「飛ばすぜええええ!!」

ヴェンはエンジンをかけ、大きくアクセルを踏み込み、目的地へと車を走らせて行った――。

PM 1:03 ーガリブラ ゲリファー第一区 ギガントビル前

「よし、到着だ!」

ヴェンが叫んだ。他の四人は車を降り、ヴェンは鍵を抜いた。ブライドはパソコンを触っている女性に話しかけた。

「クレイ、状況はどうなっている?」

「ああ……」

振り返った女性は茶髪でショートヘア、黒い眼をした女だった。服装は黒っぽい物が多い。ホルスターにはコルトM1911が仕舞

われていた。突如警官達が現れ、ギガントビル私有地の四つの端に長い棒が置かれ、その先から横に長い棒が出て、他の棒と接続した。

やがてすべての棒がギガントビルを囲み、その棒から黒いカーテンが現れた。そして黒いカーテンはついにギガントビルを囲み、外からギガントビルは何も見えない状態になってしまった。

ミステリーカーテン
これは謎の黒と言い、GSAの行動を隠すものである。謎の黒は警官たちが守っており、決して中に入られることはない。そして任務が完了すると情報操作をして、GSAの存在を隠蔽するのだ。中にいる目撃者には後始末係が対応している。

「防犯カメラのデータを手に入れたんだが、敵の数が多すぎる。およそ50人だ」

「そうか……」

後から他のチームがやってきた。他のチームの一人が入り口に重火器を置き、パソコンが配置される。

「それなら、俺たちも行くか」

セブルスがブライドに言う。

「分かった」

「よし、突入だ」

ブライドとセブルスは通信機のマイクを口の近くに当てるように装着しギガントビルへと入って行った――。

Chapter 4

P M 1 : 0 6 　　「ガリブラ　ゲリファ―第一区　ギガントビル―階」

「……誰もいない」

セブルスは銃を構えながら言った。中は洋服がズラリと並んでいる。おそらく一階は洋服売り場だろう。

ブライドは警戒しながら奥へと進む。主にテロリストが隠れそうなどころはない。カウンターにも誰も隠れていなかった。

左端にエレベーターがあるが、二人はそれに目をつけない。

エレベーターに乗れば一気に上の階へと行けるが、扉の近くには必ず敵がいるので、扉が開いた瞬間に風穴が何個も開くのがオチだ。『こちらクレイ。十時方向にある部屋に入り、奥にある扉から通路に出てください。二時方向の扉はBチームが突入します。オーバー』通信機からクレイの声が聞こえる。クレイはビルのデータを集め、地図と同じ役割を果たしているのだ。

「了解。アウト」

突如後ろからBチームのPMとBUMがやってきて、辺りを警戒した後、右側へ向かった。

二人は左からまた服が並ぶ部屋に入った。

「物陰に隠れているかも知れない。気をつけるよ」

「わかってる」

ブライドが注意したが、セブルスは当たり前のように聞き流した。『……待て』

セブルスがブライドを止めた。

「敵だ……」

二人の先には洋服の裏にテロリストが見え隠れしていた――。

フォルテの通信機からブライドの声が聞こえてきた。

『こちらブライド。これから敵がいる部屋にナイトビジョンを使い突入する。こちらに来て待機してくれ。オーバー』

「了解だ、アウト。よし、俺たちも行くぞ」

フォルテがヴェンとカイルの二人に呼びかける。ヴェンは背中にミニミ軽機関銃を背負っていた。

「クレイ、後は頼む」

「了解」

三人はビルの中へと入った。左にブライドとセブルスが物陰に隠れ奥の方を見ていた。

「二人とも、大丈夫か？」

「当たり前だ。ブライド、早く行くぞ」

「わかってる。リーダー、これから電球を破壊してナイトビジョンを使い突入します。俺たちが敵を全員 排除するか敵が俺たちを攻撃したら突入してください」

「わかった」

ナイトビジョンとは赤外線 of 投光装置及び受像装置や光増幅管装置を用いることにより、夜間や暗所でも視界を確保するための装置である。暗視鏡、暗視装置とも呼ばれる。

ブライドとセブルスはナイトビジョンを装備して銃で電球に狙いを定め、トリガーを引いた。

電球がパリーンと言う音と共に割れる。ガラスが床に落ち、二人は次々と電球を撃った。

「なんだ！？」

「くそっ、何も見えない！！」

「きゃああああああああ！！」

中には人質もいるらしい。

「よし、人質に注意して進めよ」

「了解」

ブライドとセブルスは暗闇の中を足音を立てずに歩いて行く。テロリストは気づいていない。

「……こちらブライド。リーダー、敵の数は六人、人質の数は三人です。これから敵を排除します。オーバー」

『了解。アウト』

ブライドは奥、セブルスは右奥へと向かった。

ブライドはまず前にいるテロリストの鳩尾を膝蹴りし、どこから取り出した注射器で腕に何かを注射し、注射された者は眠ってしまった。

「ティック社製の強力麻酔薬だ」

「ぐおおお……」

「どうした！」

さらに隣にいたテロリストの腕をつかみ後頭部を壁に叩きつけた。叩きつけられたテロリストは床に滑り落ち、ブライドが腹に注射器を打ち込む。

そして扉の前にいたテロリストの頸を閉め、背中を銃で叩いた。そのテロリストも気絶し、倒れてしまった。そしてこれもまた、ブライドが腹に注射器を打ち込んだ。

「ふう……」

「終わったか」

セブルスが後ろからやってくる。

「ああ、そっちは？」

「全員排除した」

「よし」

フォルテ、ヴェン、カイルの三人はナイトビジョンを装備して、ブライド達からの合図を待っていた。

『こちらブライド。リーダー、敵をすべて排除しました。オーバー』

「了解、今すぐ部屋を確保する。アウト」

三人は部屋に入った。フォルテは部屋の探索、カイルは眠っているテロリストに手錠をかけた。

ヴェンはそれぞれの人質の近くに何かのアンテナがついている箱を置いた。

「こちらヴェン。クレイ、エアストレッチャーを頼む。オーバー」
「了解。アウト」

クレイはギガントビルの入り口の近くにある三つの茶色の担架の端についているスイッチを押した。

すると担架がひとりでに動き、ギガントビルの中に飛んで行った。

そして、Aチームがいる部屋へと入って行った。ヴェンは人質を担架に乗せ、再びスイッチを押した。すると担架は今度はクレイのもとへ飛んで行く。

エアストレッチャーは人質をすべてクレイの所へ運び出した。

「人質回収できました」

「テロリストの拘束もOKです」

「よし、この部屋にはもう異常なし。クリアだ！二人とも！」

「了解。こちらブライド。クレイ、ここからどう進む？ オーバー」

「はい。ここの扉から通路に出ます。右側に階段がありますのでそこを通り二階に行ってください。オーバー」

「了解。アウト」

その時、扉の向こうから銃声が聞こえた。そして通信機からクレイでは無い男の声が聞こえた。

「こちらBのPM！ 敵から激しい攻撃を受けている！ 援護を頼む！ オーバー！」

「BチームのPMはその通路にいます。急いでください」

「了解。すぐに援護に向かう。アウト」

ブライドは扉を蹴り開けた。そして右方向にいたテロリストの一人の後頭部を撃つ。

溢れ出す血を避けながらブライドは角を曲がり、FN P90で

Bチームを撃っていたテロリストの背中を蹴り、次にその隣の3人の後頭部に一発ずつ銃弾を撃ち込んだ。

「ふう……」

ブライドはナイトビジョンを外した。だがブライドは気を抜いていた。蹴られたテロリストが立ち上がり、FN P90の銃口をブライドに向けた。

ゴス！……ガン！……ズダァン！！

それに気付いたセブルスがテロリストの腹に膝蹴りをし、頭を掴んで壁に叩きつけ、持っていたコルトM1911で脳幹に1発撃ちこんだ。

「気を抜くな。ブライド」

「……借りができたな」

ブライドはマガジンを抜き装弾数を確認した。

「後5発か……」

そして再びデザートイーグルに装填する。

「すまない。感謝する」

BチームのPMは階段の横にある部屋へと入って行った。ブライドは通信機に指を当て口を開ける。

「こちらブライド。通路、クリアだ。オーバー」

『よし、了解した。アウト』

そして数秒後、3人が扉を開けて入ってくる。

「セブルス、行くぞ」

「ああ」

ブライドとセブルスは階段を上がって行った。

その時、幾つもの銃弾が二人を襲った――。

Chapter 5

「危ない!!」

セブルスがブライドにタックルをして銃弾を避けさせる。だが一発の銃弾がセブルスの足に当たった。

「ぐおお……」

ブライドの前にいる者が足を抑える。

「大丈夫か！ セブルス！」

階段の上から敵が数人降りてくる。

「くそっ！」

「ブライド!! 閃光手榴弾を使い!!」
フラッシュバン

フォルテがブライドに指示を出す。ブライドは倒れながらも閃光手榴弾を取り出し、階段の上へと投げた。閃光が敵を攻撃して、その直後、フォルテが銃を持って敵に突撃する。

パン！ パン！――

わずか数発フォルテが撃った後、セブルスの所へ駆け寄った。

「大丈夫、かすり傷だ……」

カイルが包帯を取り出し、ヴェンは階段を警戒する。

「ブライド、一人で先に行けるか？」

「わかった。任せろ」

「リーダー！ 来たぜ!!」

「ブライド！ ヴェンが時間を稼いでる間に二階に移れ!!」

「了解」

ブライドは階段を少し上った後、左に二回回るのではなく、前にある壁を蹴って、空中で天井に背を向けて階段のフェンスにつかまった。

そしてホルスターからデザートイーグルを取り出し、フェンスに

つかまりながら、片手で手すりを支える棒の隙間から敵の足を撃つ。敵が全員倒れた時にヴェンが叫ぶ。

「行きやがれ！ ブライドー！」

「わざわざわかりきっていることを言うな」

ブライドはフェンスをよじ登り、床に足が着くとブライドはマガジンを抜いて後ろに投げ捨て、新しいマガジンを装填する。

投げ捨てられたマガジンは階段の底でカチャンと音を鳴らす。

階段で戦っているヴェンを残してブライドは一番広い部屋へと入って行った。中には敵が十数人。ブライドはテーブルを蹴って横に倒し、物陰を作った。瞬時に銃声が鳴り、ピシピシッと机にひびが入る。

「まあ、処刑すると決めたし、やってもいいか」

ブライドはデザートイーグルをホルスターに仕舞い、手を開いた。

すると、指から刃が生えてきた。

ブライドは両手のすべての指に刃を生やして物陰から出た。

「なんだあれは！？」

敵は駆けるブライドに銃口を向ける。

銃弾がブライドを襲う。ブライドは脅威のスピードで駆け抜け、銃弾を避けていた。

敵の一人がブライドの先に銃弾を放つ。ブライドはスライディングで銃弾を避けて敵のもとへと向かう。

ズバァー！！

ブライドは五本の刃で敵の一人を切り裂いた。血が吹き出し、そのまま倒れて行く。

スパパパパパー！！

「ぐあああああ!!」

他の者たちも血を噴き出しながら倒れて行った。後一人。

「や、やめてくれ!!」

ブライドは指に刃を仕舞った。

「あ、ありが——」

「断る」

ブライドは手の平から一本の長い刃を生やした。そして敵を貫いた。

「ぐおええ!!」

敵が断末魔を上げた後、ブライドは刃を抜いた。刃は赤色になっている。

ブライドは刃を仕舞い、ホルスターからデザートイーグルを抜く。鏡を見ると、顔は多量の血で汚れていた。

ブライドはハンカチを取り出し、顔を拭いて床に捨てた。

一階の通路ではセブルスが足に包帯を巻いていた。

「もう大丈夫だ」

セブルスが立ち上がる。カイルは包帯を仕舞い、ヴェンは階段を降りてきた。

「そうか。だが、一人では危険だ。俺たちと行こう」

「二階、掃除完了だ」

「人質は？」

「いや、いなかった」

「人質がいらないとなると、どこかに集められている可能性があるな……」

『こちらクレイ。リーダー、聞こえますか？ オーバー？』

「どうしたんだ？ クレイ。オーバー」

『現在チャーリーチームが三階で交戦中です。ブライドもチャーリーチームと共に交戦しています。オーバー』

「わかった。援護に向かう。アウト」

『了解』

ブライドはチャーリーチームとテロリストを挟みうちにして攻撃していた。

テロリストたちは円形のテーブルに隠れ、空薬莖を大量に排出しながら、チャーリーチームに銃弾を浴びせている。

ブライドはチャーリーチームの銃弾がこっちによく飛ぶので、攻撃をし辛かった。

「もう少し命中させてくれ……」

ブライドは手だけ物陰から出し、テロリストを撃つ。テロリストの殆どがブライドに背を向けていたので何人かが倒れた。

ブライドは物陰に隠れ、マガジンを取り換える。後マガジンは三個。

その時、後ろから閃光手榴弾が飛んできた。

スパァン！！

閃光がテロリストたちを襲う。

「ブライド、大丈夫か？」

「すみません、リーダー」

「チャーリーとブラボーは四階五階を制圧する。俺たちは屋上に行き、ボスを仕留めるぞ」

「了解」

コツコツコツコツ……

五人は屋上へ続く階段へと急ぐ。

ブライドが屋上に着くと、フェンスの近くに立つ黒人の男と、ナイフを喉に突き付けられている女がいた。人質だろう。

「それ以上動くな！！ じゃないとこの女を殺すぞ！！」

「……何が目的だ」

「解放だよ。自由だよ」

「就職先や移住を決める権利を求めるためにこんなことをやったのか？」

「そうさ！ よくわかってるなあ……」

フォルテが物陰に隠れ、何かを言った。

「——了解。」

上空にはヘリが飛んでいる。そのドアから狙撃銃、レミントンM700が顔を覗かせる。

「なあ、お前も俺たちの仲間に入らねえか？」

「すまないが……俺は任務に感情を必要としない。心では無く、体で動いてるんだよ」

ドギユウン!!

男の頭が破裂する。女は手を振り払い、ブライドの所へ駆け寄った。

「こちらブライド。屋上、制圧した。オーバー」

『ほかのテロリストも降伏しました。任務完了です。アウト』

ブライド達は階段を降りていった――

Chapter 5 (後書き)

第一章完結です。

Chapter 1

パンッ！

一つの乾いた破裂音。中心に穴が開いた的。

それを数メートル先から鋭いまなざしで見る者。

そして右手にデザートイーグルが握られていた。

「射撃練習セッション1終了です。ブライド様の点数は23点。ロ
グアウトします」

その者の周りの景色が全て緑の破片となり、消滅――

第一章から翌日 PM 8：24 〽ガリブラフォース トレーニ
ングルーム〽

ブライドは巨大な機械に線で繋がれたヘルメットを脱いだ。

右手にあるはずだったデザートイーグルはホルスターごと無くな
っている。

部屋は巨大な機械がある以外には変わったものはなく、ヘルメッ
トをかぶった者が横に一列に座っており、角には椅子と机が置かれ、
出口である扉の横には自動販売機が配置されている。

ガタツとブライドが座っていた椅子の右隣に座っていた女がヘル
メットを脱いで立ち、ポケットからカードを抜いて自動販売機に向
かう。

自動販売機は札や小銭を入れる所に換わり、細い凹みが作られている。女は持っていたカードを凹みに差し込んでスライドさせた。凹みの上にあるライトが赤から緑に変わり、ピーツと言う音が鳴った。女はコーヒーを選択してそれを取ると、一番近い椅子に座り、それを飲み始めた。

この自動販売機はガリブラフォースで働いている者個人で持っているカードを凹みに差し込んでスライドさせるとロックが外れ、商品を買えるというものである。商品は無料だが、買いすぎると給料から引かれてしまう恐れがあるので何本も買おうとする人は滅多に見られない。

ブライドは巨大な機械に付けられてあるモニターを見た。数秒後、セッション1ランキングという欄に『第二位 ブライド・マーカイン 23点』と更新される。ちなみに一位はシーファ。さすが狙撃手と言ったところか。

この巨大な機械はヘルメットに被った者の五感を操作するものであり、記憶から武器を選ぶ機能も付いている。

つまり実践と同じ経験を積むことができるのだ。だが使用しすぎると吐き気、頭痛などの副作用もある。

（自室に戻って入浴するか…）

レイリーは扉を開けた。その時、扉の向こうからヴェンが飛び出してくる。

「こい！ 冷静馬鹿！！」

ヴェンはレイリーの裾を掴み通路を走りだした。レイリーは人と当たらないよう体をクネクネさせて人を避けているがヴェンは全く気にしていない。

数分後、レイリーはAチームが持つ部屋に着いた。前日、部屋に

いなかったクレイもセブルスの隣に座っている。

「リーダー！ 連れてきたぞ！！」

「すまないな。ブライド、任務だ」

「……こんな遅くにか？」

「ああ、緊急任務だ。今から説明しよ「礼は！？」……すまないと言っただろう」

「それじゃあ俺は礼と認めない！！」

ヴェンがその言葉と同時に急に立ち上がり、腕を組む。

「いきなり偉そうになったな……」

「うつせーよ俺が連れに来てくれなかったら時間に遅れてたくせによおー！！」

「———ありがとう。」

「ええっ！？」

カイルが大きな裏声を出し、机に置いてあったカップに注がれた紅茶を飲み干す。相当驚いたらしい。

「お、おう……」

ヴェンも驚いたのか急に声が小さくなり、ゆっくりと座り込んでカップに注がれた紅茶を飲み干した。

この二人は驚くと飲み物を飲み干す傾向があるらしい。

「今回の任務はテロリストの集団生活用仮住宅を壊滅させることだ。居場所はガリブラのドランドフォレストのふもと。詳しい居場所は不明だ。ここを搜索するのはブライド、セブルスだ」

「了解」

「ひょうはい……」

セブルスはまだ半分睡眠中のようだ。ブライドの隣に座っているシーファがセブルスを殴る。

「へぶっ！」

「……………行くぞ」

ヴェンが急に立ち上がり、扉を開けて走りだす。それを見たフォルテはため息をついた。

「——今回の任務は車だ」

そしてヴェンが向かった通路へ走りだす。

ヴェンが向かった通路の入り口にはヘリポート行きと書いてあった。

「——まったく。ヴェンはせっかちなんだから……」

最初のせっかちはヘリで移動すると勘違いしてしまったのだろう。クレイが立ち上がり、二人が行った通路とは違う方向へ歩いて行く。他の三人もクレイに続いた。

ブライドも立ち上がり、扉を出ようとすると何かを思い出した。

「……俺の銃っ……」

そして扉を蹴り開けるとフォルテとヴェンが通った道を走った。通路を歩いていた者たちは間一髪でブライドを避ける。避けなければ1～2mは飛ばされただろう。

「ブライド！ どうしたんだ！？」

ヴェンを連れているフォルテがブライドの前方に見える。

「銃を忘れた！ 先に行つててくれ……」

ブライドはその場を走り去って行った。

二分後、ブライドはある白い扉の前に立ち止まった。

扉はとても分厚く、右上には赤く光るランプがある。扉の右には台座がありその台座の上には半球がついてある。その半球にも細い凹みがついていた。

ブライドはポケットからカードを取り出し、その凹みに差し込んでスライドさせる。そしてトレーニングルームに置かれていた自動販売機のようにピーツと言う音が鳴り、ライトが緑に変わり鍵が開いた。

ブライドの持っているカードはガリブラフォースで働く者たちに渡され、先ほども説明したとおり、個人で持っている。カードが無ければ飲食も自分の持つ個室にも入れないためかなり大切である。

ブライドは扉を開けて、中の部屋に入った。扉は開けっぱなしだ。中に入ると2m通路が続き、その通路に扉が二つ付けられており、それぞれトイレや浴室につながるがブライドはそんな事をしている場合ではないようだ。

通路の先には一つの部屋につながり、5畳ほどの広さ。置いてある家具はどれも一般的。パソコンとテレビは置いてあるが他の娯乐的な物は置かれていなかった。

ブライドは棚の引き出しに入っていたデザートイーグルとホルスターを取り出し、腰にホルスターを装着してデザートイーグルをホルスターに仕舞った。マガジンなどは車にあらかじめ置かれているのでいいだろう。

そしてブライドは扉から通路へと出て行った。扉が閉まるとピーツと言う音が再び鳴り、緑のランプが赤へと変わる。鍵がかかったようだ。もちろんブライドはカードを持っている。

ブライドは駐車場に向けて走るのだった――。

Chapter 2

「急げブライド！」

ヴェンの叫び声が辺りに響く。ブライドは重たい足を動かし、明るい駐車場に停められている車に向かって走る。車は抜群の耐久度を誇るガリブラのSRが設計、製造したクラウド？。形は普通のワゴン車と同じだ。だが、違う点はマフラーの部分が四つあることである。そのため、ガソリンの消費は激しいかと思われるが、最近近くの坑道で発見された超燃料^{エナジー}（普通のものの四倍のパワーのガソリン）を使っているので普通の車の限界の距離まで走れる。それでもスピードはこちらの方が勝っているのでクラウド？の方が高性能だ。ブライドはクラウド？の後部座席に乗り込んだ。ヴェンがそれを確認すると、我慢していたアクセルを踏んだ。クラウド？柱を避けながら駐車場を抜け、あるビルの裏側から出る。

「……目的地のルートは？」

ヴェンが思い出したようにフォルテに聞く。フォルテはポケットに手を入れた。

「ああ、忘れていた。このチップを挿入してくれ」

ヴェンはフォルテから受け取ったチップをカーナビの下にある挿入口にチップを入れた。すると、カーナビの画面の中心に『データを読み込んでいます……』と表示される。その表示が消えると、マップに目的ルートが表示された。

「これをやったということは……MAPに表示されていない場所なんだな」

「その通りだ。お前にしてはいい推理だな」

「お前にしてはってどういうことだ……？」

「さて、急ごうか」

ヴェンは舌打ちして、ルートに従って裏から人通りの少ない道路に出た。そこには古びた事務所や売店などが並んでいる。だが、事

務所の窓にも売店にもシャッターが下ろされ、シャッター通りと化していた。錆びた売店の看板には『こだわりのミスラル』と書かれている。

ミスラルとは、フィエイラのティガスと言う村の特産品である。外見はリンゴと似ているが、色は紫で、味はとても酸っぱい。ちなみに、シーファの好物である。

「ミスラル……休日になったら食うか」

シーファが呟いた。セブルスは相変わらず熟睡してしまっている。

「休日は明日からか」

カイルが窓の外を見ながら何気なく口に出す。

「と言つても、一週間は長すぎるな」

ブライドがしゃべりだす。

「まず一日目はピザを食べに行くし……あそこは隠れた名店だからな。二日目は病院に検査に行くし……」

「お前の事情なんか知らん」

シーファがきつぱりと言った。ブライドとシーファを除く全員が失笑した――。

「まさか、ここを進むのか？」

「その通りだが、何か不満でも？」

ヴェンが口が重そうに言ったが、フォルテが軽々と返した。

「何の道もないじゃないか――！」

そう。ヴェンの言う通り、フォルテが進もうとしているところは獣道すらなく、辺り一面草むらだった。所々、夜行性の小動物が見える。

「この車なら大丈夫だろう」

「……わあつたよ！ 行けばいいんだろ――！」

ヴェンはアクセルを踏んだ。クラウド？は色々な方向に傾きながら、草むらを進んでいく。車内はかなり揺れていた。シーファが不機嫌になる。

「車が絶対傷つくなあ……」

ヴェンが呟く。

「まるで自分の愛車のように扱うなあ、ヴェンは」

カイルが話しかける。

「すべての車が俺にとつちや愛車だ!!」

ヴェンはそう叫んだ。その時、フォルテがストップとヴェンに言う。ヴェンはブレーキを踏み、車を止めた。先刻の草むらの入り口の所から20m離れたところである。

「こんなに近くだったんなら、歩いていても良かったんじゃない」

「さて、今は何時だ……?」

ヴェンのつぶやきを軽く無視してフォルテが車の中に置かれていた腕時計を持った。デザインはシンプル、と言うか、何も施されていない。色彩は黒と白だ。

「……9時24分か。セブルス、起きろ」

「起きてるお」

「珍しいな。現在9時24分だ。9時30分になったらお前とブライドがテントを搜索するからな」

「了解」

セブルスは防弾ベストを着て、肩パッドを装着し、防弾ベストにつけられたポーチに車のトランクに入れられていたマガジンを入れた。最後にホルスターからコルトM1911を取り出した。ブライドも同じように準備をする。

「それと、二人とも、これを受けとっておいてくれ」

フォルテは二人に小型の無線機と発信器、そしてサプレッサーを渡した。二人はすぐに自分の持っている銃にそれをつける。

「その無線機で何かあったら連絡してくれ。テントやテントを狙撃できる場所を見つけたら、その発信器を設置してくれ」

「了解」

「……そろそろ、9時半だ。任務を開始するぞ」

ブライドとセブルスは身を屈めながら先へと進んで行った。その

様子からかなり警戒していることがわかる。

「さて、俺たちはあっちがテントを発見したら行動する。カイル、クレイ、俺と、シーファ、ヴェンで二組に分かれるぞ」

「この毒舌野郎とかとね……」

ヴェンが呟く。シーファはヴェンを睨みつけ、吐いた。

「お前も人に言えるような奴じゃないぞ」

「うるさいんだよ。口出しするな」

カイルはヴェンとシーファの睨みつけが互いに電撃がほとばしっているように見えた。

「これだから二人は……」

フォルテはため息をつく。カイルはすぐにその場から目を離す。巻き込まれるのを防ぐためだ。

「リーダー。早く説明してください」

クレイが冷静に言った。ふざけてる場合じゃないと訴えているようにも見える。

「ああ。ヴェンは発信器を探して、シーファを狙撃ポイントへ移動させる。後は後方警戒だ」

「俺たちはテントを発見したと連絡が入ったら、テントの中はブライドとセブルスに任せて、周りの敵を排除する。いいな？」

「……了解……」

フォルテを除く四人はそう言って、それぞれ自分の持った銃にサプレッサーを取り付け、防弾ベストを装着した。ヴェンはひとりでミニミ軽機関銃を背負う。

「連絡を待つぞ——」

Chapter 3

ブライドとセブルスは岩陰に潜みながら二人の歩哨がこちらに背を向けるのを待っていた。相手に気付かれると無線機で知らされ、増援を呼ばれる可能性があるからだ。いくら二人の戦闘能力が高くとも、数が多い方が勝つ可能性が高い。

歩哨は迷彩服に防弾ベスト、繊維強化プラスチックでできた軍用ヘルメットを装備している。出来るだけ一発で仕留めることができる可能性が高い首の部分をブライドは狙っていた。

セブルスは車にいた時とは違い、冷徹な目をしている。その目は真っ直ぐブライドを見ている。ブライドが行動するのを待っているのだろう。

一人の歩哨がこちらに歩いてくる。ブライドは音を立てずに岩陰に顔を隠し、空いた左手でナイフを構える。歩哨は岩の一手前の所で踵を返し、向こうへと歩いていった。どうやら気付かれなかったらしい。

ブライドは顔を岩から出して、銃口を一人の歩哨の首に向けた。

パシユツ———ドサツ———

首から鮮血が飛び散りながら歩哨が倒れる。振り返った歩哨に対してセブルスはナイフで首を切り裂く。辺りに血溜まりがいくつもできた。セブルスはそれに目も向けず辺りを警戒する。そして、歩哨が持っていた二つのアサルトライフルを手にし、一つをブライドに渡した。

「現地調達か。まあこの銃で戦えそうもないしな」

「死体が気付かれるのも時間の問題だ。急ぐぞ」

セブルスの発した言葉はとても低く、これも車にいた時とは大違いだ。ブライドは実はセブルスは人が変わったと意識している。

昔からそうだった。戦いときにはセブルスは人が変わり、情を忘れ任務を遂行してきた。時には相手が息絶えても相手が持っていた銃を使い、念のためだと言って頭に数発撃ったこともある。それがブライドには恐ろしくも見えている。

「ああ」

ブライドは倒れた歩哨を見ながらセブルスと歩を進めて行った。

ブライド、セブルスが探すテントは一階建てで横縦にかなり広がっていた。壁は白色だ。

中にはテロリストたちがくつろいでいた。家具はとても少ない。寢床について疲れを癒すもの。銃の手入れをするもの。情報収集をするもの。食料の調理をするもの。種類は様々だ。中にはドラム缶風呂を作ろうとしている者もいた。そんなものどこから持ってきたのだろうか。

その時、出口の扉が開いた。やってきたのは一人のテロリストだった。

「ユニット9が死んでいるとの報告が!!」

テント内が騒がしくなる。それを周りで聞いていた一人の短髪の髭を剃った太い眉が印象的な巨漢が立ち上がった。

「全員黙れ!!」

その声はテロリストたちを一瞬にして黙らせた。ほとんどが我にかえったような顔をしていた。

「すいません、ボス……」

「お前らはユニット3だな？」

「はい！」

「お前たちはその辺りにいるユニット8に現場に急行し、辺りを捜索せよと伝える！ 後は連絡を待て！ ユニット1、2はその応援に向かえ！ ユニット4は荷物を車に積み込め！ 他の者はテントの守りを強化しろ！」

全員が一斉に動き出す。寢床から跳び上がり、調理用の火を消し、

銃の手入れをやめ、武器を持ったテロリストたちは次々とテントの外へと飛び出していく。ついにはテントにいるのはその巨漢一人になってしまった。

（ついに知られてしまったか……政府の犬達とはことん俺たちを追うつもりなんだな）

あの者たちは情を忘れてしまった。もはや人間では無い、怪物だ。「俺は怪物になる前に、辞めたんだ……！」

巨漢は閉じた眼を開くと、残された最後の武器、ナイフとグリッブが無いグレネードランチャー、M203が装着されたM4カービンを手を取った。その白い顔は俯いたためか、とても疲れたような顔をしていた。

顔を上げ、巨漢はナイフを仕舞い、M4カービンを片手に扉を開け、新しい戦場への一步を踏み出した。

ユニット1、2がテントを離れた時、ブライド、セブルスは辺りを警戒しながら小さな丘を目指していた。

（あそこなら、見えるかもしれない）

あの丘は身を隠せる岩が幾つもあり、テントを狙うには十分な高さだ。だが、問題はテントが見えるかだ。見えなければ当然狙撃もできない。

「よし、俺がテントが見えるか調べてくるから、辺りを見てくれ」

「了解」

ブライドはセブルスを残し、なだらかな坂を上っていく。途中の岩はとても厚く、盾に取るには十分だ。

丘の一番上まで辿り着いた。正面には長方形の建物が建っていた。あれがテントだろう。ブライドがセブルスに声をかけようとすると正面から誰かが走ってくるのが見えた。テロリストである。その時ブライドは言う言葉を変えた。

「隠れる、正面から敵だ」

セブルスは丘の下にあった岩に隠れた。このあたりは岩が多いので、身を隠すところはいくらでもある。テロリストたちは丘の所で曲がり、ブライドとセブルスが来た左方向へ走っていった。どうやら気付かれなかったらしい。

ブライドはその事を確認すると、セブルスに再び声をかけた。

「発信機を頼む」

セブルスはポーチから発信器を取り出すと、その場に設置した。それをしているうちに、ブライドは無線機でフォルテと通信を行っていた。

『こちらブライド。リーダー、狙撃ポイントを発見し、発信器を取り付けました。オーバー』

「わかった。すぐにそちらに向かう。ここかそのポイントどちらが遠いんだ？ オーバー」

『……ポイントの方が近いです。オーバー』

「わかった。アウト」

ブツと音が鳴り、通信が切れる。フォルテは車から受信機を取り出した。

「お前たち、狙撃ポイントに行くぞ」

「俺たちも行くんですか？」

カイルがフォルテに問う。フォルテは表情変えず答えた。

「その通りだ。こちらより、狙撃ポイントがテントに近いからな」

「その丘からテントが見えるなら、発信器はいらないじゃないですか」

「テントを見失ったときのためだ。一応いるだろう」

フォルテはそっくり、ホルスターから銃を出した。

五人がしばらくポイントに向かって歩いていると、多数の岩の少しの隙間に影が動いていた。

「ヴェン、あの岩のむこうに敵が二人いる。ミニミで一掃してくれ」
「了解」

ヴェンはコルトM1911をホルスターに仕舞い、ミニミを両手に持って、岩に隠れながら前進していく。その時、テロリストの叫びがフォルテの耳に入った。

「誰かいたぞ!!」

そして銃声が鳴る。フォルテは舌打ちをし、受信機を仕舞って走る。

「あの馬鹿! 見つかったのね!」

「もう少し警戒しろ」

フォルテの後にクレイ、カイルが続く。

「撃ち合いは嫌いだ……狙撃なら一方的に倒せるのに」

最後にシーファがヴェンを助けに行った。

ヴェンは二つのアサルトライフルの集中砲火を岩に隠れ避けていた。

相手は岩を貫通できると思っていても、その様子は全くないので弾の無駄遣いだ。相手がリロードをする時、つまり、集中砲火が止む時、彼が持つミニミ軽機関銃は火を吹くだろう。

バラバララッ

……—

集中砲火が止んだ。ヴェンは岩陰から身を出そうとした。だが、銃弾がちょうど脇のしたを通る。

「まだリロードしていないのかよ……」

ヴェンは物陰に隠れるように後ずさりし、他の岩陰に身を潜めた。そこにはフォルテがいた。

フォルテはヴェンを見ずにSIG SAUER P250を持ち、上半身を岩から出した。

そして二発の銃声。その銃口から放たれた二つの銃弾は一つの喉元を撃ち抜いていた。一人のテロリストの首に深紅の花が咲く。フ

オルテは岩陰に再び身を潜めるとヴェンに怒鳴った。

「この馬鹿野郎！　どれだけ迷惑掛かってるんだと思ってるんだ！」

「わかってます！」

「わかってるんだったら早くあいつらを排除しろ！」

「あーもう！」

ヴェンはミニミを持って岩陰から飛び出し、トリガーを引きながらテロリストに突進した。

銃弾が吸い込まれるようにテロリストに埋め込まれる。テロリストは膝をつき、倒れてしまった。

「まだいます」

クレイがフォルテに言う。

「何人だ？」

「四人です」

「シーファ。狙撃できるか？」

「この位置なら……できる」

「あいつらを葬ってくれ」

「了解」

シーファはコルトM1911をホルスターに仕舞い、レミントンM700を手に射撃体勢に入った。そして四つの銃弾が放たれ、数秒たつと、レミントンM700を仕舞った。

「排除完了」

フォルテはこくりと頷いた。

Chapter 4 (前書き)

4というのはガリブラ、ゲイラス、フィエイラ、ベギランの四つのフォースのことです。

Chapter 4

ブライドとセブルスはテントのある方向に向かって走っていた。さつきから敵の姿が見えない。何かおかしいとブライドは感じていた。

「さつきから敵が見えないんだが、どう思う？」

「どう思うにも何も、まずはテントを見つけること、それだけだ」

「まあ、それはそうだけでも……」

「……ほら、テントが見えたぞ」

セブルスが指差した先には名前通り、黄色い巨大なテントが立っていた。

フォルテ達は岩だらけの平地を進んでいた。だが、丘は一向に見えない。

「どういうことだ？ この辺りに信号があるはずなんだが……」

フォルテは首をかしげている。ヴェンが構えていた銃を下ろすと、文句を言った。

「どうせ、受信機が壊れてるんだろ」

「いや、そんなはずはないんだ。正常に作動している」

「シーファ？ お前ちゃんと探したのか？」

「探したさ。だが、全然見つからなかった。お前はどうかんだ」

「俺だつてやつたぜ」

フォルテは俯いて考え込んでいる。

（透明な発信器なんてまだ開発されてないはずだ……）

第一、光学迷彩すら今になっても開発されていない。発信器はあるはずだ。

しかし、丘は見当たらない。発信器もない。どういうことだ――

「なあ……」

シーファがフォルテに話しかける。

「なんだ？ シーファ」

その時、シーファが少し尊敬する所だった。普通の者ならばこれだけ何かに集中していると「後にしてくれ」、「少し黙っておいて」などと言って他人の話を聞かなくなる傾向が多い。だが、フォルテはどんな時でもシーファたちに耳を貸すのだ。

「どうして、リーダーは俺たちの話を聞いてくれるんだ？」

「チームの仲間、だからだろ」

「当たり前だろ、シーファの馬鹿」

ヴェンがフォルテのいい言葉の後にシーファにとってうざったい言葉をかけてくる。

（こいつ……空気読めてねえのか？）

シーファはむっとする。だが、フォルテに意見を述べた。

「受信妨害機でも使ってんじゃないのか？」

フォルテが眉間にしわを寄せる。

「いや、ごめん。4しか所有していない物をテロリストが持つてるわけないよな」

「……その可能性はある」

「おいおい、フォルテまで馬鹿になっちまったのか？」

ヴェンがにやけながら言うが、フォルテは無視して語り始めた。

「五年前、ガリブラフォースのGSAにドイス・ケリバンと言う巨漢がいた。その者は正義感にあふれ、仲間に頼られる存在だった」

「そいつがどうかしたのか？」

「だが、ドイスは仲間と共にガリブラフォース所有の武器や道具を盗んで逃げだした。その後、テロリストになったそうだ。その盗んだ道具の中に信号妨害機が含まれていた」

「……ん、そうか。その信号妨害機を使われてるかもしれないって言いたいんだな」

「その通りだ」

信号妨害機とは元から発信されている信号を特殊な電波で隠し、偽の信号を作る高度な機械だ。だが、その物は非常に重く、少しでも衝撃を与えてしまうと壊れてしまうデリケートな機械でもある。

「まあ、ブライド達に連絡するしかないか……」
ヴェンが頭をかきながら言った。

「信号妨害機、正常に作動しています！」

「よし。そのまま慎重に扱え」

「わかりました」

巨漢は部下が信号妨害機の方へ戻っていくのを見送る。そう、この巨漢がドイス・ケリバンなのだ。

ドイスはふとあの事件を思い出した。

五年前 AM? : ? ーある公園ー

ドイスはベンチに座り、久々の休日を昼食まで過ごしていた。

目を閉じてみると、太陽が瞼に当たっているせいか、赤く見える。

「寝ることはできなさそうだな……」

目を開く。すると一人の少女とその親が遊んでいるのが見えた。

だが、その楽しそうな雰囲気とは裏腹に、嫌な気配を感じとった。

後ろから火薬の匂いが漂ってきた。

「っ! ?」

ドイスは銃を隠し持っている腰には手をかけず、ゆっくりと後ろを振り向いた。

後ろの道には警官が二人、右側からこちらに歩いていた。ドイスはさっきの匂いは気のせいかと思ったが、一人が妙に機嫌が悪い。

舌打ちまでしている。

「俺ああいうの嫌いなんだよね……」

その警官が子供の父の近くに立つ。丁度、その父が警官に近づくと、警官がひとりでに転んだ。

「お前、公務執行妨害だ！」

「えっ……」

まさに転び公妨である。警官は痛そうに頭を押さえる。だが、それは芝居だとドイスは確信していた。警官がわざと転ぶ時、背中だけを地面に当てたのだ。頭には当たっていない。しかし、よくこんな第三者がよくいるところで転び公妨を行ったものだ。とドイスは思った。

警官が頭を押さえていた手を放すと、不気味な笑みを浮かべて手を腰の方にやった。

「よって、死刑とする」

警官の手には銃が握られていた。

パン！――

子供の父の眉間に穴が空き、父は崩れるように倒れる。

「なっ……」

ドイスは目を疑った。だが、これは真実だ。その死体の妻が悲鳴を上げる。ピンクのボールを落とした少女は崩れ落ちた。どうやら気を失ったらしい。死体の妻は警官に駆け寄り両肩を掴んで体を揺らす。

「どうして夫を殺したんですか！」

警官は驚くほど無情な目で言った。

「俺たち警官に暴力をふるったからじゃないか」

「夫を返してください！！」

妻は泣きながら叫ぶ。

「うっせーなあ……おい」

警官は公園の入り口で待っていたもう一人の警官を呼ぶ。

「なんだ？」

「さっきからこの女がうるさいんだ。とりあえず罪でも被せて手錠をかけとけ」

「わかった」

「夫を……返して!!」

妻がもう一度叫ぶ。だが、その声は銃声にかき消される。そして、もう叫び声はしなくなった。

「どうせなら殺っておいたほうが楽だろ？」

「そうだな」

「さて周りのやつらはどうする？」

この公園で生きているのはドイスと倒れている少女。そしてベンチで眠りこけている老人だった。

「別にどうだっていいだろ、いざとなればアレを使うし、訴えられる可能性もないからな」

「そうだったな。警官は訴えられないんだったな……」

警官二人は銃を仕舞って公園を出て行き、姿が見えなくなった。

ドイスは動けなかった。警官に対する恐怖では無い。警官は殺しを普通にやっているという事実を知ったショックで動けなかったのだ。警察に関する情報がまったく掴めなかったのも理由が分かった。今すぐにでもあの警官二人を捕まえなければ。ドイスは立ち上がろうとした。

だが、足が動かない。どうしても動かない――。

Chapter 5

警官が姿を消すと、ドイスは足の硬直が解け、ガクツと地面に膝をついた。倒れている少女はいまだに目を覚まさない。

今すぐあいつらを探さないと――

ドイスは片膝に手をつき立ち上がり公園を出ようとした。

「待て。」

その時、男の声がした。その声こそはしわがれているが、威圧感をかなり感じる。

（まさかあの警官達の仲間か？）

ドイスは銃に手をかけ振り返る。そこには警官の姿はなく、かわりに老人が立っていた。その青い眼は鋭くドイスを見つめる。

「……なんだ？」

「今追つても無駄だ。警察はすべてを行うのがすべてなんだよ」

「俺はGSAだ！」

「……ほう。なら教えてやる。GSAは政治家たちの駒だ」

「なっ……ふざけるな！俺たちは正義を信じてやってるんだ！」

「その正義は偽りさ。たとえば、お前たちが殺してきたテロリストたち。あれは政治家たちの奴隷だったものが大半さ」

「奴隷？……ふざけるな。奴隷制度なんてない」

「そう言い切れるか？」

「なんだと？」

「ここ最近世界の人口が急激に減っている。それはなぜかわかるか？」

「……っ!!」

ドイスは大きく目を見開く。

「そう。気づいたようだな。その理由は政治家たちが人間を捕らえ、奴隷として働かせ、世界の人口から省かれるようになった」

「出鱈目だ!!」

「そうか、なら、モレリッジ通りの「ハウムホテル」に向かいそこで一晩過ごしてみる。夜に異変が起こる。俺の言ったことが本当だつてわかるはずだ」

「この女の子は？」

ドイスが質問し老人はチラリと少女を見る。

「俺が保護しておこう。何、心配せんでもいい。俺の家は――

の――室だ」

「……いいだろう。だが、何もなかったら、なぜ嘘をついたか問いたです」

「そうか。だができないな。真実は真実だ」

ドイスは少女を立たせ、グレーの車に乗せる老人の姿を見届けると、公園を出た。その時、老人がアクセルを踏みながら不敵に笑うのが一瞬見えたような気がした。

だが、ドイスは歩を進めるのをやめなかった。もし本当であれば、

自分が信じて進んできた道が、悪の道となってしまう。

ドイスは自分の信じていた道が悪でないことを祈りながら、走っていたタクシーを止めた。

「モレリッジ通りまで。」

右手の人差し指がエレベーターの4のボタンを押す。次に体が浮くような妙な感じがし、その感じがなくなった後、扉が開き始めた。足は前へと動き始め、腰をひねりながら右へ曲がった。部屋は201号室、202号室と続いている。

このまま先に進むと、もう目的地である209号室にすぐ着くだろう。

腰には拳銃を隠し持っている。いざとなればこれを使う。そうやってほしくはないが。

視界に209の番号が入った。そのドアの前に立ってポケットから鍵を出す。次にドアノブの鍵穴に鍵を差し、右に捻ると、ガチャツと音が鳴り、押すと扉が開いた。

中は綺麗に清掃され、ゴミ一つ落ちていない。テレビの横には冷蔵庫が置いてあり、クーラーも完備している。ベットは綺麗に整えられ、後で調べたのだが、怪しいところは一つも見当たらなかった。「とりあえず、出かけるか……」

ドイスは昼から夕方までを過ごすと、またホテルの209号室へと戻った。異変は起きていない。先刻来た時と同じ風景だ。ドイスはテレビをつけ、ベッドに座る。そして、近くのコンビニで買った弁当を袋から出した。

コンビニは、人類がニューアースに移住してからも根強く続いている有形の文化だ。今でもかなりの人気を誇っている。24時間営業などもう古く、数多くの店舗で何かしらの工夫を重ねている。

ドイスは弁当に入っているコバという植物から作られるコバ粉という粉（小麦粉のようなもの）で作られたパスタを口にする。

弁当を空にすると、入浴に向かい、気づけばもう9時を過ぎていた。

ドイスは電気を消して、ベットに座り、壁にもたれた。眠気が襲

いかるが、眠ってはいけない。

（果たして異変はおきるのだろうか……）

そして、ドイスは見たのだった。

ホテルの地下で捕らえられた者たちが奴隷として働かされている姿を。異臭が漂い、鉄はすべて錆び、輝きを失った悪の世界を。

PM10:08　ドランドフォレスト

テントに到着したブライド、セブルスの二人は岩陰に隠れながらテントを見ていた。ここに到着してからかれこれ10分は経つ。

「いい加減、遅すぎないか？」

セブルスがブライドに囁く。

「少し、相手の状況を確認しようか」

ブライドは無線機を取り出し、フォルテたちと連絡を取ろうとする。

「こちらブライド。聞こえますか？」

「——こちらフォルテ。聞こえるぞ。言いたいことは分かる。

発信機が見つからないんだ。オーバー」

「どういうことですか？　オーバー」

「相手は多分信号妨害機を持っているんだ。そのために俺たちは発信機を見つけれないんだ。オーバー」

「あり得ないと思います。信号妨害機は4しか所有していないはずですよ。オーバー」

「その可能性があるかもしれないんだ。理由は後で話す。信号妨害機がどんな形か知っているよな？　オーバー？」

「……すみません」

「はあ……分かった。信号妨害機はなあ、ビデオデッキにアンテナ

を着けたようなものだ。色はおそらく灰色。お前たちには少し惜しいが信号妨害機を破壊してもらいたい。オーバー？」

『了解。アウト』

ブライドは無線機をしまいセブルスの姿を見ると、左手にスコープがついたとても小さいライフルを持っていた。不思議なことにマガジン、いやマガジンを入れる穴がなく、代わりにトリガーのやや上に小さな扉がある。

「OUT R39（架空の武器）じゃないか。任務になぜ持ってきてたんだよ」

「いや、必要だと思ってな」

「普通最前線に出る奴が予備スナイパーライフルなんて持ってくるか？」

「備えあれば憂いなしなんだよ。いいからやれ」

「ったく……後でリーダーに言っておくからな」

ブライドはR39を受け取ると、スコープを覗き込んだ。信号妨害機はよく見える位置に置いてあった。近くにそれを操作している敵が一人。

「こつやつてると、試験のことを思い出すな……」

「GSA試験のことか」

「あの時、スナイパーになるかどうか迷ったんだよな……」

ブライドはそう言いながら狙いを定めトリガーを引いた。静かに銃声が鳴り、空薬莖が排出され、銃弾は風を切って信号妨害機を貫く――。

Chapter 6

R39の放った弾丸は信号妨害機を貫き、そのままそれを操作していた者の脚に命中した。叫び声があたりに木霊する。

ブライドはR39をセブルスに返すと、無線機を取りだした。

「こちらブライド、聞こえますか？ オーバー」

「——こちらフォルテ。ありがとう。おかげで発信場所が分かった。今すぐ場所へ向かう。アウト」

「おい、アレ見てみるよ」

「ん？」

発信機をしまったブライドが見たのはM203が装着されたM4カービンを持った巨漢だ。見るからにリーダーのような雰囲気を漂わせている。ドイスである。

「隠れる」とセブルスが小声で言う。ブライドはホルスターからデザートイーグルを取り出すと、影に身を潜めた。

だが次の瞬間、ブライドが隠れていた岩の側面が何かによって削られる。

「っ！？」

岩が削られる音が何秒か続き、ブライドが気付いた時には既に岩は蜂の巣のように穴が幾つも空いていた。

ドイスがM4カービンのマガジンを入れ替える。横にいたテロリストがドイスに話しかける。

「……倒しましたか？」

「いや、まだだ。」

先ほどの岩にはブライドの姿はなかった。そして、すぐ横にある岩から安全ピンがない手榴弾が飛び出してくる。

手榴弾はドイスの方向には向かっているが、ドイスは手榴弾が爆発するまでの時間を数々の戦場ですでに体感しており、その間に回

避できると確信していた。ドイスは隣にいた仲間の手を引く。

だが、ブライドが岩からジャンプしながら飛び出した。左手にはデザートイーグルが握られている。

「なっ!?!」

ドイスは慌ててバックステップする。そしてブライドがデザートイーグルの引き金を三回ほど引いた。

ボォン!!

ドイスの目の前で爆発が起こる。ドイスにはあまり怪我はなかったが、手を引いていた仲間は既に事切れていた……

「奴ら……強制爆発させやがった」

ブライドとセブルスは幾つもの岩を潜り抜け走っていた。後ろには三人ほど敵が追ってきている。

どうしてブライドが先ほど銃弾を回避できたのかというと、セブルスが手を掴んで銃弾から避けさせたためである。セブルスがいないければ今ごろあの岩と同じ運命を辿っていたころだろう。

セブルスが後ろに銃口を向けトリガーを引く。不思議なことに空薬莖を空中で回収していた。

「その薬莖どうするんだ?」

「こうするんだよ!」

セブルスは溜まった薬莖を思い切り床にぶちまけた。

「まだまだあ!」

セブルスはポーチからまた大量の空薬莖を取り出し、ぶちまける。数秒後、そこを通った敵全員が滑って転ぶ。

「そこだあ!!」

セブルスがスモークグレネードを投げる。相手は戸惑い、何も見えないため、岩や仲間同士でぶつかってしまふ。

「今のうちにここから離れるぞ!!」

「いや、俺が仕留める。少しだけ目を瞑っておいてくれ。」

「……分かった」

ブライドはデザートイーグルをホルスターに仕舞った。

「さてと……」

セブルスが目を瞑っているのを確認すると、ブライドは右手を鋼鉄の刃に変えた。掌である部分は今では切っ先に変身している。

ブライドは一気に走りだした。まず最初に煙から脱出しそんな敵の左胸を貫く。そのまま回転しながら周りの二人の胸を斬り、両腕を刃に変えて、二人の喉を貫く。最後の一人には両手合わせて五本の長爪で切り裂いた。わずか数秒の間にブライドは敵を全滅させたのだった。

「目を開いてもいいぞ」

ブライドが呟く。セブルスがゆっくりと目を開いた。

「うわ……これはひどいな」

セブルスが見たのは煙が消え去り、死体が山のように重なってまるで大量の赤ワインを零したように血が広がっていく。そこには両腕が紅で染まったブライドが立っていた。ブライドは無線機を取り出す。

「こちらブライド。場所には着いたか？」

「こちらシーファ。今着いたところだ。狙撃できる準備はできてる」

「少し狙撃は待ってくれ。後、リーダーとヴェンにはテントの正面まで来てくれと伝えておいてくれ」

「……何を企んでいるんだ？」

シーファがフォルテと代わった。フォルテはとても真剣な声でこちらに聞いてくる。

「俺たちがこれから——」
数秒後。

「了解した」

フォルテがブライドの提案を承知すると、ブライドは無線機を仕舞い、やっと両手を見た。

「……血を拭くものないか？」

「今やってる場合じゃねえよ。というか、気づくの遅すぎるだろうが。それぐらい気づくだろ」

「……芝居には飽きた。さっさと行くぞ」

「芝居じゃないだろ。それに冷静なキャラやめろ。ボケ属性持つてくるくせに」

「俺をヴェンと一緒にするな！！」

「同じレベルだよ」

セブルスが呆れた。ブライドはもう一度両手を見る。そして両手を上げ首を横に振ると、デザートイーグルを手に握り進んでいった。「そんな呆れたみたいな行動をしたいのは俺のほうだよ」

セブルスはそう呟きながらブライドについて行った。

一方、テロリストはテントの裏で軽トラに荷物を次々と乗せていた。その中にはドイスもいた。もう一つの軽トラには沢山の若者たちが乗っていた。

「ボス。若い奴らはもう脱出させますか？」

「ああ。そのほうがいいだろう」

ドイスは荷物を運んでいたテロリストを再び配置に就かせ、若者を乗せた軽トラの助手席に乗っていた者に話しかけた。これもまた若者だ。

「いいか。今日からお前が新しいボスだ」

若者はポカーンと口をあける。

「え、どういうことですか？」

「俺たちとはここでお別れだ。敵が迫ってきてる」

若者は一瞬驚いた顔をしたが、大きな声で言った。

「自分も加勢します！！」

「いや、お前には撤退してもらおう」

「そんな！ どうしてですか！！」

「お前たちはまだ若い。未来がある。俺たちはもう潮時さ。ここで戦って少しでも敵を減らす」

「そんなこといけません！ まだ一つ軽トラが余ってるでしょ！！」
「こいつももう潮時だ」

ドイスは手榴弾を残りの軽トラに投げた。軽トラは爆発し、使用物にならなくなってしまふ。

「うそだ…… あり得ない……」

ドイスは涙目になっている若者の肩を叩いた。

「お前は強い。戦闘センスもある。運動神経もある。今日からは守られる側ではなく守る側に入るのさ。大丈夫。お前ならできる」

「そっ…… んなっ……」

若者はもうすでに涙がこぼれおちていた……

ドイスは静かに笑みを浮かべる。精一杯の笑みを。

「俺たちの使命は、お前たちに託した。決して忘れるな。俺たちの悔しさを」

若者は涙を服で拭った。

「…… っはい！！ あなたのこと、一生忘れません！！」

「それでいい……」

ドイスは運転手にサインを出した。窓が閉められ、エンジンがかかる。

そして、二つの軽トラはどこかへと消え去ってしまった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1153o/>

ブライド ～実験台?197～

2011年9月17日03時26分発行